Ginerva Gambino
Kyffhäuserstr. 31
50674 Cologne
www.ginervagambino.com

Miki Kanai: „Body pt. 2 (An Ex-hibition)“, Geijutsu Shincho, May 2018:182

London

愛人発覚に悲劇も ピカソ50歳の1年

「ピカソ 1932年：愛、名声、悲劇」展

3月8日>>9月9日 ロンドン、テイト・モダン

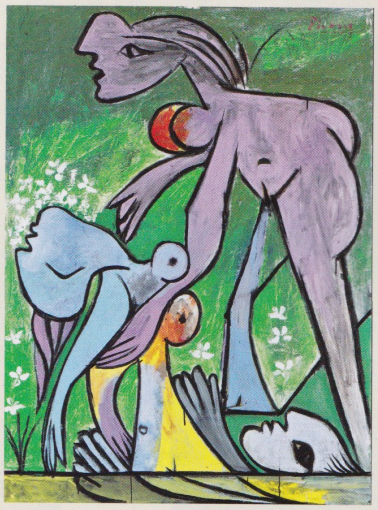
パブロ・ピカソ（1881～1973）にとって、50歳で迎えた1932年は若い愛人が喜びをもたらし制作意欲が再燃、そして悲劇と、凝縮された「驚異の1年」となった。本展はこの転機の年を月ごとに追い、絵画、彫刻、素描の合計100点以上から画家の公私を読み解く試みだ。

前年のクリスマス当日に仕上げた2点《短剣を持つ女》と《赤い肘掛け椅子に座る女》から展示は始まる。恋敵を殺めている女性を描いた前者は妻オルガとの緊迫する夫婦関係をほのめかし、後者は22歳の秘密の愛人マリー・テレーズ・ウォルターの顔をハートの形に置き替えて描いている。そして32年の3月には、マリー・テレーズをモデルに12日間で「横たわる裸婦」の大画面シリーズを仕上げた。

当時のピカソはすでに国際的にその地位を築いていたが、一部の批評家からは過去の画家だとも評されていた。そんな評価を覆すため、6月にパリの画廊で回顧展を開催。自らキュレーションして、新作を含め制作年を表示せずに異なる様式の作品が入りまじるかたちで展示した。本展でも、その様子が一部再現されている。新作に繰り返し描かれていたことで、ついに愛人の存在が公になったのもこの回顧展でのことだ。

年の瀬も近づいた頃、マリー・テレーズが汚染された川で泳いで病気になり、金髪のほとんどを失う悲劇が起きた。ピカソは悲嘆し、暗い色調で溺水や、また強姦をモティーフに描き、結果的にそれは大恐慌やファシズム台頭など当時の欧州の不穏な空気とシンクロすることになった。《救出》[右]は、溺れた女性とそれを助け出す女性、さらに水中から救出を手伝う3人目の女性が一つの画面に登場する。特に前者2人の構図は、5年後の大作《ゲルニカ》の嘆く母子の姿を予兆している。

取材・内田さり



●パブロ・ピカソ《救出》 1932年 油彩、カンヴァス 144・5×112・2㎝
Fondation Beyeler, Riehen/Basel, Sammlung Beyeler
© Succession Picasso/DACS London, 2017

Köln

元カレ4人招待展！

「カシャ・フダコウスキのキュレーションによるボディ パート2（An Ex-hibition）」展

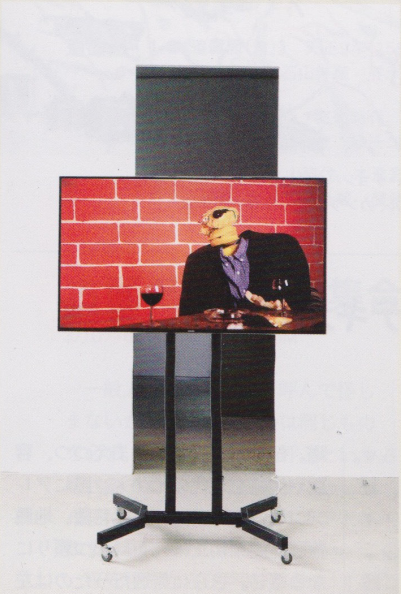
1月20日>>3月24日 ケルン、ジネーヴァ・ガンビーノ

ケルンのギャラリー、ジネーヴァ・ガンビーノでは、「ボディ」をテーマにした展示シリーズを展開している。その第2回目となる本展のキュレーターとして招かれたのが、ベルリンを拠点に活動するカシャ・フダコウスキ（1985年れ）。パフォーマンスや彫刻、インスタレーションなどで、社会の構造を批判的に、しかしユーモアたっぷりに表現する注目の作家だ。そして今回彼女がキュレーションをした4人のアーティストは、なんと全員が彼女の「元カレ（Ex-boyfriend）」！

フダコウスキはまず4人の元カレを、手紙やメールで本展に誘った。作家フィーと制作費は各100ユーロ（約1万3000円）。参加を表明したのは2人だったが、あとの2人については、フダコウスキが彼らに送ったメールを一部黒く塗り潰して展示した。アレクサンダー・ブレンチリーの作品は、まるで当てつけのような、現パートナーと赤ん坊とのスリーショット写真。もう1点は、口下手な人形がそこに存在しない女性を口説こうとするヴィルヘルム・クロツェクの映像作品[左]だ。オープニング・パーティに現れたクロツェクは、フダコウスキや他の元カレとの関係を居合わせた観客に質問されていたという。

昨年のドクメンタとヴェネツィア・ビエンナーレでは、キュレーターがそれぞれのパートナーを出品作家として迎えていることに対して、公私の問題を問う議論が起こった。アートを取り巻くシステムと、それに対するモラル。フダコウスキの展示は、「体」を張った関係性の検証となっていた。

取材：かないみき



ベルリンの作家ヴィルヘルム・クロツェクの映像作品《切手》（2018年）。
人形が、不在の女性を口説く。
元カレの作家4人を招待した企画展展示風景。
Courtesy the artists/Ginerva Gambino